



## 前庭リハビリテーションに対する理学療法の現状

目白大学耳科学研究所クリニック  
目白大学保健医療学部言語聴覚学科

伏木 宏彰

前庭リハビリテーション/平衡訓練(以下、前庭リハビリテーション)は、1940年代に考案された Cawthorne-Cooksey exercise に由来する。以降、運動を行う際の患者教育の重要性や特定の動きにより誘発されるめまいに対する慣れの概念が提唱されるなど多くの研究により発展してきた。米国では前庭リハビリテーションを専門職とする理学療法士が存在する。約1700名(2022年3月現在)が前庭リハビリテーション Special Interest Group (SIG) に登録され、多くの医療現場でリハビリテーションが実施されている。

2015年のコクランレビューは、末梢前庭障害患者に対する前庭リハビリテーションは中等度から強いエビデンスがあり安全で効果的な方法であると報告した。2016年 American Physical Therapy Association (APTA) の Neurology Section より臨床診療ガイドラインが発行された。前庭リハビリテーションは転倒予防や歩行能力の改善に大きな効果をもたらすこと、リハビリテーション職の介入効果が示されている。近年、海外ではスマートフォンやタブレット端末、仮想現実やバイオフィードバックといったテクノロジーを活用したリハビリテーションも試みられている。

本邦では1990年に日本めまい平衡医学会から平衡訓練の基準が公表され、医師主導のもと、外来でのエクササイズ指導、小冊子を配布してのホームエクササイズ、集団指導など種々の形態で行われている。一方、理学療法士が前庭リハビリテーションを行っている施設は少ない。ボランティアあるいは臨床研究として行われているのが現状である。リハビリテーション職と協働する医療提供体制の整備が望まれる。

2021年、日本めまい平衡医学会よりメカニズムに基づいた練習方法が提案された。前半は前庭リハビリテーションの目的とメカニズム、提案された練習方法、期待される効果について概説する。後半は米国の臨床診療ガイドラインに示された主な重要臨床課題とエビデンスレベル、国内での普及の現状と課題について述べる。

### 略歴

1994.3 富山医科薬科大学大学院 博士課程 修了  
1994.4 富山医科薬科大学医学部 助手  
1995.1 米国オレゴンヘルスサイエンス大学 留学  
2009.7 富山大学附属病院 講師  
2012.4 富山大学附属病院 診療教授を併任  
2013.1 済生会高岡病院 部長  
2013.8 目白大学保健医療学部言語聴覚学科 教授  
2015.10 目白大学耳科学研究所クリニック 院長を併任  
現在に至る

### 資格:

博士(医学)  
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会 専門医  
国際パラニー学会 正会員  
日本めまい平衡医学会 めまい専門会員  
日本めまい平衡医学会 めまい相談医

### 学会および社会活動:

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会(遠隔医療・オンライン診療に関するWG委員)、日本めまい平衡医学会(代議員、前庭リハビリテーションガイドライン作成WG委員長、学会のあり方委員、用語委員、医療保険委員、Equilibrium Research誌査読員)、日本聴覚医学会、日本耳科学会、日本頭頸部癌学会、日本気管食道科学会、日本アレルギー学会、日本東洋医学会、日本女性医学会、Frontiers in Neurology, Neuro-Otology (Review Editor) 他